

＜第143回 国際ARCセミナー(沢田千秋氏・沼口隆氏)レビュー＞

国立音楽大学附属図書館所蔵ベートーヴェン初期印刷楽譜コレクション

—— 室内楽編曲の意義と楽しみ

岡崎 壮彦(立命館大学文学部)

E-mail lt1405iv@ed.ritsume.ac.jp

1. はじめに—コレクションの概要

2024 年 12 月 25 日に行われた第 143 回国際 ARC セミナーでは、「国立音楽大学附属図書館所蔵ベートーヴェン初期印刷楽譜コレクション:室内楽編曲の意義と楽しみ」と題し、沢田千秋氏¹および沼口隆氏²による発表が行われた。(なお、セミナーのプログラムには講師として柄田明美氏³の名前もあったが、実際の発表は沢田氏と沼口氏の両氏によって行われた。)

今回の発表の内容に立ち入る前に、まず「ベートーヴェン初期印刷楽譜」とは何かという点について、簡潔に述べておきたい。「ベートーヴェン」といえば、言わずと知れた作曲家ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(Ludwig van Beethoven, 1770-1827)のこと。そして「初期印刷楽譜」とは、彼の存命中から 19 世紀末までの間に印刷された楽譜をいう。発表者によると、国立音大の図書館は、彼の作品の初期印刷楽譜を 1400 点以上所蔵しているとのことである。なお、2026 年の国立音大創立 100 周年を念頭に、現在、それらのコレクションのデジタルアーカイブ化が、同大学と立命館大学アート・リサーチセンター(ARC)との共同プロジェクトとして進められている。

副題が示すように、本発表では、このコレクションの中でも、ベートーヴェン以外の人物によってオリジナルの楽器編成とは異なった形へと「編曲」された楽譜に焦点が当てられた。発表の前半には、まず沼口氏によって、音楽学の視座から当該楽譜の特徴と意義が語られた。後半では、沢田氏のピアニストとしての視点から、いくつかの編曲版について実際の演奏の映像を交えながら解説がなされた。

本稿では、発表の中で特に興味深く思われる点について振り返ったうえで、簡単に管見を述べることにしたい。

2. 発表の要旨

2-1. 研究資源としての編曲譜

エジソンによる蓄音器の発明(1877 年)は、音声複

製技術、録音メディアなるものの先鞭をつけたという点において、音楽史上の一大事であった。以降、円盤型レコードの発明とともに、録音の大量複製が可能となり、音楽文化を支えるに至ったことは周知の通りである。人々はレコードや、CD や、あるいは YouTube によって、ベートーヴェンの音楽に親しむことができるようになった。

ではそれ以前の、録音媒体のない時代に、人々はいかにしてベートーヴェンの作品に親しんでいたのか。無論、生演奏しかあるまい。しかし、沼口氏曰く、何も演奏会に出向いて聴くということばかりではなく、人々が自分で実際に弾くことも頻繁になされたらしい。

そこで重要になるのが、楽曲の編曲である。ひとつの管弦楽団を必要とする交響曲であれども、ピアノ版に編曲してしまえば、ひとりで、あるいは連弾で、演奏を楽しむことができる。その需要の高さが、独奏ないし室内楽編成に仕立て直された、多くの編曲楽譜を作らせたのだろう。著作権の意識が今ほど強くなかった当時、ベートーヴェンの死後に勝手に編曲者が手を加え、出版させたものがほとんどだという。

ベートーヴェンの楽譜をめぐるのは、幾度にわたる批判校訂や、作品目録の作成など、世界中で研究が進められてきた。一方、別人による編曲版については、ベートーヴェンの「正しい」作品とみなされておらず、またその出版の全容を把握するのが困難であることから、従来あまり研究が進んでこなかった、と沼口氏は指摘する。けれども、19 世紀のベートーヴェン作品の受容を音楽社会史的に考えるにあたって、こうした編曲版は、注目すべき研究資源である。とりわけ、HIP(Historically Informed Performance)、すなわちその曲が描かれた当時の技法や演奏習慣を復元的に演奏しようとする態度においては、初期印刷譜という貴重な史料にあたることのできるメリットは大きいと考えられる。

2-2. 楽譜のデジタルアーカイブ

近年、楽譜をデジタルアーカイブし、インターネット上で公開するという取り組みが、様々な機関によってな

されている。とりわけ有名なのは、「国際楽譜ライブラリープロジェクト」(International Music Score Library Project、IMSLP)、別名「ペトルッチ楽譜ライブラリー」(Petrucchi Music Library)⁴である。世界中のユーザーが、パブリックドメインのものなど公開可能な楽譜を自由にアップロードできる仕組みになっており、本稿執筆時点(2025年1月28日)で79,000点以上もの楽譜が閲覧・ダウンロード可能な状態になっている。ベートーヴェンをはじめとする著名な作曲家の作品についてはかなり網羅されているといっておく、編曲譜を含む出版譜だけでなく、作曲家の自筆譜が投稿されている場合もある。

沼口氏によると、そうして共有された編曲譜を演奏し、その演奏をまたインターネットで公開する、というような動きも増えてきているという。IMSLPでは、楽譜と紐づける形で、演奏の音源や映像を投稿・視聴できるようになっているし、無論YouTubeにもそうした動画が散見される(次節で扱う沢田氏の演奏も、YouTubeにて公開されている)。

発表の中では、そうした動きについて、音楽学者をはじめとする多彩な研究者や演奏者が「多様な作品像」を見出すための手掛かりになるのではないかと、の言及があった。編曲版だからと安易に斥けるのではなく、ひとつの作品受容のあり方としてそれを受け入れることが期待されているのだといえよう。

以上、沼口氏による発表箇所では、国立音大のコレクションのもつ価値とともに、その一般公開が研究や演奏にとって有意義であることが語られた。では、実際の演奏者にとって、19世紀に印刷された編曲譜はどのような魅力を持っているのだろうか。発表後半の内容を顧みつつ、次はその「愉しみ」を探してみたい。

2-3. 編曲版の愉しみ

沢田氏によれば、ベートーヴェンのピアノ編曲版というのは玉石混交であるという。例えば、「悪魔的な」ピアノの超絶技巧で知られ、作曲家としても多くの名曲を残したフランツ・リスト(Franz Liszt, 1811-1886)は、ベートーヴェンの9つの交響曲全てのピアノ編曲を手掛けているが、それらは芸術作品としての鑑賞に十分堪えるものであり、今日でも演奏の機会がそれなりにあるだろう。しかしながら、編曲者がかような著名人である場合は極めて稀なのであって、国立音大コレクションに含まれるほとんどの編曲譜が、世間ではほとんど名の知られていない編曲者の手によるものである。沢田氏が実践したのは、そうした、あまり日の目を見ることがない編曲譜を調査・演奏し——氏の言葉を借りるならば「発掘」し——埋もれた魅力を探し出すことであった。

今回のセミナーでは、3つのベートーヴェン作品の編曲版(時間の都合上、一部抜粋したもの)に耳を傾けた。まず1曲目は、「交響曲第5番ハ短調」(Op.67)、俗称「運命」を、ヴァイオリンとピアノの二重奏に仕立て

直したもの⁵。総譜の第1ヴァイオリンのパートをただ独奏するといった単純な編曲ではなく、オーケストラでは様々な楽器が担っている音が、ヴァイオリンとピアノへ上手く割り振られているという。実際耳にすると、管弦楽に比べて極端に音色の種類が少ないために、有名な「ジャジャジャーン」の動機が幾度となく繰り返されている様が鮮明に聴き取れる。そもそも骨格のはっきりとした曲ではあるが、編曲によって、構成がより掴みやすくなっている印象を受けた。

2曲目は「ピアノ協奏曲第3番ハ短調」(Op.37)をピアノ四手連弾用に編曲したもの⁶。ピアノ協奏曲をピアノ1台に、しかも2人の奏者のために作り変えるという大胆な編曲であり、沢田氏曰く、ひとつのパスセージを2人で代わる代わる弾くことを思えば、「独奏した方が楽」とのことであった。また、現代の、コンピューターで浄書されたものと較べると当時の楽譜は読みにくく、2人で演奏するにあたって譜読みに苦労したそうだ。独奏ピアノとオーケストラの各楽器のパートを1台のピアノにまとめていくということで、ごちゃごちゃと混濁した響きになるかと思いきや、音域を広く使いながら音数がすっきりと整理されており、旋律が際立っていたのが印象的である。

最後は「ピアノソナタ第29番変ロ長調」(Op.106)、通称「ハンマークラヴィーア」⁷。オリジナルは「ピアノソナタ」の名の通り独奏ピアノのための作品であり、技巧的にかなり難度が高く、規模も大きい大曲として知られる。今回は、その四手連弾版が紹介された。前曲と同様、沢田氏によれば、元々1人でも演奏の難しい作品であるが、2人で弾くことでより困難さが増すように思われるとのことであった。ただ同時に、編曲者の創意工夫がよく伝わってくるという。プリモとセコンド——すなわち連弾の2人の奏者——の間の音域の割り振りや旋律の受け渡しに、ピアノの技巧を熟知した者の手になる編曲であることが見て取れるほか、原曲より音数を増やすことで、より壮麗さが増している箇所もある。編曲の妙がよく味わえる編曲譜であるとともに、2人で協調しつつ弾くことの喜びが伝わってくる演奏だといえよう。

3. おわりに——発表を踏まえて

組曲『展覧会の絵』と聞いて、音楽を愛好する人々は、その作曲家の名と同時に——あるいはもしかするとそれより先に——原曲たるピアノ曲を達意のオーケストレーションによって編曲してみせたラヴェル(Maurice Ravel, 1875-1937)の名を思い出すだろう。ラヴェル版は、「管弦楽の魔術師」の異名に恥じない傑出した編曲として知られ、今となつては原曲以上に演奏機会が多いかもしれない。優れた編曲は、作品の美点を引き出し、増幅させ、人口に膾炙させる力を持っているように思われる。

国立音大の初期印刷楽譜コレクションの中にもそうした編曲譜が眠っているかもしれず、「発掘」

することができないとも限らない。沼口氏は、編曲版のコレクションとしてまとまったもののデジタル化の事例は国内外にほとんどないと述べていた。本プロジェクトはその魁であり、様々な楽譜アーカイブの呼び水となることが望まれる。

先述した IMSLP は極めて充実した取り組みであるものの、楽譜とそのメタデータの提供は有志による協力に依存しており、中には家庭用のプリンター複合機でスキャンされたような白黒画像も多く含まれている。それは ARC で行われているような専門的なデジタル化作業とは似ても似つかないものである。本レビューの執筆者も ARC での楽譜の撮影作業に携わっている一員であるが、初期印刷譜は、版形も綴じ方も、音符や文字の字体も様々であり、銅板のプレートマークがはっきりと表れていたり、以前の持ち主の書き込みがあったりと、頁を捲るたびに様々な発見がある。細かな気づきが学術研究として実を結ぶこともあり得るがゆえに、白黒の低画質のスキャニングではアーカイブしえないそうした情報をも丁寧に拾いつつ、デジタル化することが肝要だといえよう。

また、編曲版コレクションをデジタルアーカイブ化することは、これまで知られていなかった編曲版の演奏機会を増やすことに繋がる。編成の小規模な編曲版は、プロの音楽家のみならず、学校教育の現場を含む、アマチュアによる演奏に活用できると考えられる。学術研究への利用はもちろんのこととして、一般市民の娯楽や、子どもたちの音楽教育にも有効なアーカイブとなることを期待したい。

[注]

- 1) 国立音楽大学演奏・創作学科准教授
- 2) 東京藝術大学音楽学部楽理科准教授
- 3) 国立音楽大学附属図書館司書
- 4) <https://imslp.org/>
- 5) 吉岡麻貴子 (Vln.)・沢田千秋 (Pf.) による演奏:
https://youtu.be/x-vwbOaQ1wY?si=_Q5aoDl40W6Qmds6
- 6) 坂本真由美 (Primo)・沢田千秋 (Secondo) による演奏:
<https://youtu.be/1965hgqrbgU?si=Xb4sYykDuEgYVlw1>
- 7) 同上